

-2021 年度教育職員特別研修報告書-

- ・ 経営学部教授 富増 和彦 1【報告書】
(大阪公立大学大学院経営学研究科)
- ・ 現代中国学部教授 薛 鳴 2【報告書】
(名古屋大学大学院人文学研究科)
- ・ 文学部教授 片岡 邦好 3【報告書】
(愛知大学人文社会学研究所)
- ・ 短期大学部教授 杉本 貴代 4【報告書】
(東京大学大学院教育学研究科)

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	富増和彦	
所 属 ・ 職 名	経営学部教授	
研 修 期 間	2021年 9月 1日 ～ 2022年 8月 31日（365日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①．自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2．国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3．海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	社会関連会計の発展方向について	
研修内容の概要	1・CSR・サステナビリティレポートの開示実態や制度についての文献調査（新聞、図書・雑誌、ウェブサイト 閲覧など） 2・身近な環境ホルモン調査への参加	
研修成果の概要	1．については、TCFD 提言の内容の理解を進めることができた。改訂版（気候関連財務情報開示に関するガイダンス2.0〔TCFD ガイダンス2.0〕：TCFD コンソーシアム編、2022年 3月改訂）の検討を進め、企業が作成する CSR レポート（関連ウェブサイトを含む）への多大な影響を確認することができた。 2．については、消しゴムと感熱紙に含まれるビスフェノール類・フタル酸エステル（いわゆる環境ホルモン）の国際調査に参加し、消費者関連情報開示の問題について、一つの知見を得ることができた。社会関連情報開示の領域で、消費者向け情報開示を研究することはまだそれほど行われておらず、研究テーマとしてこれから取り上げるべき問題であり、その取り掛かりの機会となる調査であり、参加した意義は大きかった。	

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	薛 鳴	
所 属 ・ 職 名	現代中国学部・教授	
研 修 期 間	2021年 4月 1日 ～ 2022 年 3月 31日（365日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①．自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2．国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3．海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	「関係」にかかわる日中言語行動の対照研究	
研修内容の概要	「関係」の最たるものとも言える「親族名称」に関して一連の研究を行ってきた。その後、対人関係のとらえ方がどう言語行動に影響を及ぼしているのかについても考えるようになった。ここ二十数年来の研究を「関係」という視点からまとめたいと考え、この研修期間を利用して、執筆に取り組んだ。執筆に際し、これまでの自身の研究を全面的に再構成し大幅に加筆した。研究当初の資料やデータに加え、それ以降の研究成果や当時辿り着かなかった先行研究を精査し、より多角な視点を持って、自身の研究の位置づけもより明確になった。これもデータベースの使い勝手の良さや本学図書館の係の方のご協力に負うところが多い。自宅にしながら、必要な資料に辿り着け入手できたこと、研究に専念する時間が持てたことにありがたく思っている。なお、国内研修機関の名古屋大学大学院人文学研究科へは、コロナ下で出来るだけ対面を避け感染予防を優先し、受け入れの先生とリモートによる交流ができた。	
研修成果の概要	研究のまとめに先立って、中国語親族名称のテクノニミーについて考察する必要を感じた。最近、目にした親族名称の子供中心的用法の日英中韓四か国語の語用論対照研究に、参考になっている中国語についての先行研究は、必ずしも実態を反映していないと考えたのがきっかけである。中国語テクノニミーに関する先行研究を整理したうえ、実態を知るべく、アンケート調査も行った。先行研究については、『文化人類学事典』にも言及されている中国の学者による“親従子称制”の研究をアメリカ人類学誌に発表された H. Y. Feng (馮漢驥) (1936) に辿り、そこから、さらに清の銭大昕『恒言録』に遡った。後に H. Y. Feng (馮漢驥) (1936) を発展させた芮逸夫 (1945) にも当たることができた。残念ながら、これらの研究は中国では知られるようになったのは、それから約50年後の伍鉄平 (1985) になってしまう。伍 (1985) によってテクノニミーに“從兒称谓”という訳語が当てられた。現在、日中対照研究では、日本語の親族名称の家族内の使い方によくこの用語が使われているが、“從兒称谓”の研究を全面的に整理し意味論と語用論の両面から論じる研究はまだない。本研究では意味論的なプロセスを辿ったうえ、主に語用論的観点から考察を行った。現地に足を運んでの調査が制限されるなか、中国人研究者の方々のご協力を得て、アンケート調査アプリを用いた調査や映像資料による用例の収集を行うなど、比較的充実した研究ができた。後は自身のこれまでの研究のまとめに取り組んだ。 なお、研究成果を文末に示す。	

様式第 4（特別研修）

	【研究論文】「中国語におけるテクノニミーとその実態——日本語と比較しながら——」 愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第45号 2022年1月 p99-125 【書評】周星著《生熟有度—漢人社会及文化的一项結構主義人類学研究》 愛知大学現代中国学部『中国21』Vol. 55 2021年12月 p237-242 【学術講演】「基於中日対比的親族称谓研究」中国蘇州大学外国語学院 主催学術講演 （2021年10月11日）
--	--

教育職員特別研修実績報告書

研 修 者	片岡 邦好	
所 属 ・ 職 名	文学部・教授	
研 修 期 間	2021年 4月 1日 ～ 2022年 3月 21日（355日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	「エスノポエティクスと隣接領域の融合に向けた実証的研究の推進」	
研修内容の概要	2021年度研修期間中に以下の課題達成を目指した。 1. 本研修期間中に、国内外においてさらなる談話データの収集に努める 2. 既収のデータをもとに、詩的特徴を分析した研究書を単著および共編著として刊行する 3. 音声・映像データといったマルチモーダルな要素に着目して、より完成度の高いコミュニケーションモデルの提出を心掛ける	
研修成果の概要	上記研修期間中に以下の成果が上がった。 1. コロナ禍が再帰的に発生したこともあり、屋外でのデータ収集は見送らざるをえなかった部分が多いが、3回程度、複数話者の発話データは屋外で収集することができた。 2. データ収集は十分にできなかったものの、既存のデータを再分析追加分析することで、以下の書籍のための原稿はほぼ完成に近づいた。 (1) 日常のポエティクスに関する論文集の編集と執筆(4月現在、初校校正中：2022年刊行予定ひつじ書房) (2) メディア談話についての単著の執筆（草稿提出済み：2022年度内に刊行予定 ひつじ書房） (3) クライミング談話に関する単著の執筆(4月末までに草稿提出予定：2023年刊行予定 Bloomsbury Publishing) 3. 上記の編著書において、コミュニケーションにおける詩的原理の応用と、空間内の身体活動に関する談話分析モデルの提出を目指している。 なお、上記2(1)のゲラを研修成果の一部として提出させていただく。	

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研 修 者	杉 本 貴 代	
所 属 ・ 職 名	短期大学部・教授	
研 修 期 間	2021年 4月 1日 ～ 2022年 3月 31日（365日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研 修 課 題	乳幼児期の環境と言語・コミュニケーションの生涯発達に関する研究	
研修内容の概要	（１）東京大学大学院教育学研究科（研修受け入れ先）では、新型コロナウイルス感染症の状況によっては、オンライン（Zoom 等）環境を利用して、毎週１～２回、研修に参加し助言・指導を受ける。 （２）豊橋市内および浜松市内におけるフィールドワークを実施する。 （３）研修課題に関連する国内外の先行研究のレビューし、乳幼児対象研究に適した実験計画の検討を行う。	
研修成果の概要	＊詳細は別紙をご参照 （１）東京大学大学院教育学研究科（研修受け入れ先）では、オンライン（Zoom 等）環境を利用して、週１～２回、遠藤利彦教授をはじめとする複数の教授陣の授業および研究会へ参加し、生涯発達研究に有用な研究手法とコロナ禍における発達研究の動向について学んだ。また、研修者が研究対象とする「乳幼児期固有の発達特性」に合わせた研究の発展に有益な助言・指導を受けた。 （２）豊橋市内および浜松市内における小規模保育施設３園でのフィールドワークを実施した。乳幼児の保護者対象の質問紙の作成と検討。 （自治体（園長会）からの要請により、本研究には個人情報が含まれるため、現時点ではデータ等は公開しない） （３）研修課題に関連する国内外の先行研究のレビューし、乳幼児対象研究に適した実験計画の検討を行った。	